

『私の指輪物語』

マリア・マグダレナ 城野 道代

七年前のある朝、湖のほとりを歩いていて、小さなパン屋さんを見つけた。毛糸の帽子を被った、どこかに障害があるらしい青年は、小柄で澄んだとても美しい瞳の持ち主で、そばに面差しがよく似た母親らしい人が寄り添っていた。手作りパン屋さんを親子で営んでいたのである。

全周十六キロメートルで、太古に大地が二つに裂けて出来たという、この湖の東側にはホテルや美術館が多く、私はよく歩き回ったものである。その日、店の隅の籠の籠の中になにやら黒ずんだ銀製の品が数個入っているのを見つけた。それは小さな銀の指輪で「見つけて、みつけて！」といっているような気がした。手に取ると五ミリくらいの幅の平打ちの銀の指輪で「TU ES MA LUMIERE」と刻んであった。おそらくパリの下町あたりの男の子がひそかに思いを寄せていた女の子に、そっとプレ

ゼントするのにちょうど手ごろなものでもあったろうか？値段を聞いたらびつくりするほど、安かったので買ってカナダ人の老師に見せびらかした。

「あなたはパン屋にいったのに、何故、指輪を買って帰りましたか？」「籠の中にあつたから買いました」と答えたが、神父さまの不思議そうな表情は消えなかつた。ちなみに神父さまはケベックの出身でフランス語が母語である。次に隣町の彫金屋さんに相談した。銀は磨かれてピカピカと輝き、面取りして見違えるばかりになり、裏には25・DEC・99 M.J.と記念に刻んでもらった。

対句を刻むのには手持ちの玉を使うことにした。中国旅行のおり長城の麓の売店で求めたシルクロードを越えてきたものらしい、とろりとした、落ち着いた緑色の貴石を銀でかこむだけの指輪にした。その帯の部分に刻む言葉を考えることは楽しい作業だった。もはや断片すら記憶にないフランス語の冠詞とEの字の上につくアクサン・グラーブのことを語学に堪能で神

父さまの仕事のアシスタントであるSさんに教えてもらった。

「TU ES MON ESPOIR」
れで二つの指輪は言葉で繋がった。直訳すれば、「あなたは私の光

あなたは私の希望」となる。でも私は勝手にいろいろと、言い替えてみた。「TU」は特に親しい人にしかな使わない言葉である。「あなただけが私を照らす一筋の光この世であなたこそ私を生かすのぞみ」私はあながれに満ちた少年のように、あなたに惹かれる。

むかし、公共要理を習ったとき、「希望とはこの世を過ごすための慰めで、天国では主を直接、見て喜ぶので、もはや希望は満たされて賛美するのみである」と習った。最近の教会の教えではどうだろうか？

時は春、復活祭の夜明けも近い。

『一致と赦しの共同体』

マリア・ヘルナデッタ 山本 千恵子

一致の条件とは、初めに言葉、対話すること、語り合い、聴き、話し合い、赦し、赦し合い、励まし、励まし合い、祈り、祈り合うこと。神様が下さった言葉を使って、国籍の違いも職場の違いも認め、認め合い、声をかけること、笑顔をあげること。これは大切な事と思う。障害のある人もない人も皆、溶け合い、一つとなつて生きることに、生き合うこと。私は言葉を失ったが、この教会に再び来て今、会話が出来るようになった。これもみな共同体のおかげである。これが一致である。一時は孤独に陥ったが、また復活できたのも共同体である教会のおかげ。本当に感謝の一言に尽きる。神様の御言葉を通して人と人が語り合うが、福音を述べ伝えるということなのだろう。そして、愛の行いを通して証しするのだろう。

赦し合いながら・・・